

専門学科から高等教育への進学における 「教育内容の有意性」の認識

— 普通科との比較の視点から —

岡 部 善 平

1 問題の設定

本研究の目的は、「専門学科から大学等、高等教育機関への進学」に着目し、高等教育への進学を希望する専門学科の高校生が自ら経験している職業教育カリキュラムにいかなる意味を付与しているのかについて、普通科との比較の視点から実証的に検討することにある。

高校教育を含む中等教育のカリキュラムの主要な特徴の一つに、アカデミックな教育と職業に関する教育の分化がある。ヤング (Young, M. F. D.) はこの分化を多くの教育システムに共通の性質として捉えているが (Young 1998, 2008), 日本の高校教育も従来、進学を主な目的としアカデミックな教育を提供する普通科と、就職を主な目的とし職業教育を行う専門学科⁽¹⁾とに分化し、それぞれ独自の役割を担うことが想定されてきた。

ところが近年、専門学科はその位置づけと役割に関して再考を迫られている。第一に、高卒労働市場が縮小し、学校から仕事への移行が困難化するなか、「教育の職業的意義」への関心が高まっている。本田 (2005, 2009) は「職業的意義」の観点から学校の教育内容全体を捉え直すことの重要性を指摘しているが、こうした「教育の職業的意義」の再構築への関心は、高校における普通科と専門学科との差異性の低下の動向と連動している。すなわち、職業生活への移行過程における高校教育の位置が変化し、専門学科においても狭義の職業人養成を越えた教育内容の設定が求められ、また普通科においても何らかの形で職業的要素を取り入れた教育内容の導入が要請されている (横井 2008)。専門学科は、就業に直結するという従来の役割を後退させてき

ているのである（番場 2010）。

第二に、こうした普通科と専門学科の差異性の低下に拍車をかけているのが「専門学科から高等教育への進学」である。大学入学枠の拡大と少子化を背景に大学や専門学校をはじめとする高等教育機関⁽²⁾への進学率が全体として上昇し、これまで進学をあまり念頭に置いてこなかった専門学科においても高等教育機関への進学者が増加する傾向にある。図1は専門学科から大学等への進学率の変化を示したものであるが⁽³⁾、その割合は上昇を続け、2010年の段階で23.5%となっている。これに専修学校専門課程、いわゆる専門学校への進学を含めると、専門学科からの進学率は44.5%に及ぶ。従来職業に必要な能力の育成を趣旨としてきた専門学科は、高まり続けている進学要求にも対応することが求められているのである。

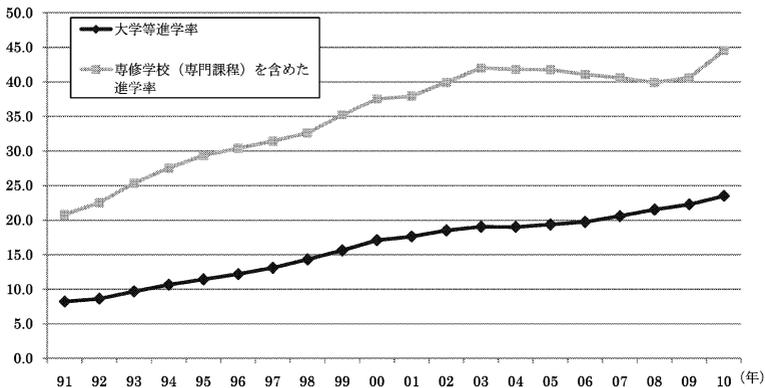


図1 専門学科から大学等への進学状況 (%)

文部科学省『学校基本調査』各年度版より

以上に述べてきた専門学科をめぐる構造的な変化は、そこで学ぶ生徒にも必然的に影響を及ぼすことになるだろう。とくに専門学科から高等教育への進学については、進学を希望する生徒が専門学科の教育内容をどのように解釈し、その意義をいかに認識しているかが重要となる。というのも、専門学科から高等教育への進学は、従来就業準備を担ってきた専門学科の教育内容

と進路との対応関係の変化を示しており、「～を学べば……の進路が開けてくる」という教育内容の有意性をカリキュラムが明示し難くなっていることを表しているからである。ここでいうところの「有意性」(relevance)とは、学校教育が個人ないし社会に対してもつ「意義」を表しているが⁽⁴⁾、教育内容と進路との対応関係の変化は、こうした教育内容の有意性の認識にも影響を及ぼすものと考えられる。

ところが、専門学科から高等教育への進学についての先行研究を概観すると、生徒から見た教育内容の有意性に関してはこれまで看過されてきたことがわかる。というよりも、専門学科からの進学それ自体、明確な研究対象として取り上げられることがきわめて少なかった。そのなかにあって、佐藤(2000)は高大接続の観点から専門学科での普通教科の履修状況を普通科との比較を通して検討している。その結果、専門学科では普通教科について特定の1教科を重点的に履修させなければ大学受験に対応するための十分な学習時間が確保できず、したがって普通教科の学習がバランスを欠いたものにならざるを得ない点を指摘している。その上で佐藤は、専門学科の生徒が大学での専門的な学習の一部を高校で先取りしていることから、そのアドバンテージを活かして大学での専門科目の履修時間を基礎学力の充実に当てるようにするなど、専門学科からの進学を高大接続の問題として捉え直す必要性を提示している。また、中村(2006, 2011)は、専門学科から大学等への進学アスピレーションの形成過程に着目し、推薦入試制度をはじめとするマス選抜装置の普及が専門学科における進学アスピレーション上昇の誘導メカニズムとして機能していることを明らかにした。必ずしも進学を前提としているわけではない専門学科の高校生の一部がマス選抜装置を通じて進学へと水路づけられることで、結果として専門高校の進路多様校化が進展することを、中村は上記の分析に基づき指摘している。

これらの先行研究はいずれも、専門学科からの進学を中等教育システムの構造的な変化の契機として捉えている点で、本研究と問題関心を共有している。一方で、研究の焦点が科目履修や選抜制度といった教育システムの機能

に当てられており、生徒が教育内容をいかに解釈し、どのように意味づけているかについては十分な議論がなされていない⁶⁾。しかし、専門学科からの進学がアカデミックな教育と職業教育という知識の枠組みの再考に関わる問題であることを考えると、教育内容そのものに対する生徒の認識に分析の目を向ける必要があるだろう。

そこで本研究では、高等教育への進学希望者が専門学科の教育内容にいかなる有意性を見いだしているのか、また専門学科での学習経験が生徒の進路選択とどのように関連しているのかについて、普通科との比較を通して検討することとした。これを通して、進路との直接的な対応関係が低下した状況において学習者が職業教育のいかなる点に有意性を見いだしているのか考察したい。

2 分析の視点

以上に述べてきたように、本研究の問題関心は、「現在経験している教育内容」と「希望する進路」との間に一定のズレが想定されるとき生徒は教育内容をどのように意味づけ、いかなる有意性を認識しているのかについて、「専門学科から高等教育への進学」を切り口として明らかにすることにある。ここから、次の2つの分析課題が導き出される。すなわち、

- ① 進学希望者は教育内容のどの側面を「自分にとって有意なもの」として認識しているのか。専門学科と普通科との間でその認識に差異はあるのか。
- ② 教育内容の有意性の認識と進路展望との間にはどのような関連性があるのか。進学希望者は、現在の教育内容と大学ないし専門学校での希望分野とをどのように関連づけているのか。

まず第一の分析課題、進学希望者は教育内容のどの側面を「自分にとって有意なもの」として認識しているのか、専門学科と普通科との間でその認識に差異はあるのか、についてである。生徒が教育内容を何らかの形で「有意

なもの」「意義のあるもの」と認識するためには、そうした認識を獲得するプロセスが必要となる。問題は、このプロセスが専門学科と普通科で異なっているのではないか、という点である。認識形成のプロセスが異なっているとすれば、教育内容の意味づけの仕方についても専門学科と普通科の間で差異が生じると推察される。

この点について考える上で示唆的なのが、バーンステイン(Bernstein, B.)の「教育知識の分類と枠づけの理論」である。バーンステインは、教育関係において伝達され獲得される知識の基本構造を分析する上で、分類(classification)と枠づけ(framing)という概念を提示している。「分類」とはカテゴリー間の境界維持の程度を表している。国語、数学、理科などは教科カテゴリーであるが、このカテゴリー間の境界がどの程度の強度で維持されているかによって教科の提示のされ方は異なってくる。すなわち、分類が強いところではこれらの教科は互いに明確に区別されて提示される。逆に分類の弱いところでは、教科間の区別は曖昧になり、より領域横断的に提示されることとなる(Bernstein 訳書 1985, 94 頁, 2000, 41-44 頁)。一方、「枠づけ」は、伝達・獲得される知識の選択、順序、ペース配分、評価基準に関して、伝達者と獲得者が手にしうる統制の幅を示す。枠づけについても分類と同じく強度の程度があり、強い枠づけでは伝達者(教師)の側が選択、順序、ペース配分、評価基準にわたって統制し、弱い枠づけでは獲得者(生徒)の側が一見より多くの統制を有する(Bernstein 訳書 1985, 94-95 頁, 2000, 50-54 頁)。

分類と枠づけは、それぞれの強度の値(強い/弱い)の組み合わせによって、ある教育的文脈における知識の獲得プロセスを規定する。すなわち、分類はどのような言説、内容、価値が当該カテゴリーを形成し、何が区別されるのかについての「認知ルール」を作り出す。それに対して枠づけは、当該カテゴリーを表現するのに適切なコミュニケーション(たとえば国語、数学、体育、芸術等のそれぞれで求められる文章の形式、口頭でのやりとり、行動の仕方)を組み立てるための「実現ルール」を規制するのである。

分類と枠づけの理論に基づくならば、専門学科という文脈において知識の

獲得者である生徒が教育内容の有意性を認識しようとする際、「普通教育」と「職業教育」の分類のあり方が重要な意味をもつことになる。なぜならば、「職業教育」が「普通教育」と分離されて提示され、伝達されることで、生徒の間に職業教育に対する独自の価値が共有されると考えられるからである。片山(2010a, 2010b)は、このバーンステインの見解に基づき、工業高校での生徒の進路選択の基準および能力アイデンティティを調査した。その結果、工業高校において生徒は工業科目の成績を普通科目以上に重視し、その成績が職業選択の基準となっていること、また能力アイデンティティの規定要因として工業科目の成績が独立した効果をもっていることを明らかにした。このことから片山は、専門学科では職業科目こそが「正当な知識」「有意な知識」として生徒に認識されていると指摘した。

片山の研究は、生徒の「学校から職業への移行」における職業教育の有意性を分析の対象としている。それでは、“就職”とは異なる“進学”を希望する生徒においても職業教育の側面が「有意なもの」「正当な知識」と認識されているのか。本研究では、この点について明らかにする必要がある。

つぎに本研究では、第二の分析課題として、現在の高校での教育内容と大学や専門学校での希望分野とはどのように関連づけられているのかに着目した。すでに述べてきたように、本研究の論点は「教育内容と進路との対応関係の変化」にある。しかし、これは“進学か就職か”という大枠での対応関係の変化を表しているに過ぎず、もし高校での専門分野(工業、商業など)と進学先での専攻とが関連しているとすれば一定の対応関係が維持されていることになる。

高校での専門分野と大学等での専攻との関連性については、主に高等教育研究の分野でデータの蓄積が始まっている。山村ら(2010)は、全国の大学・学科を対象としたサンプリング調査において、専門学科出身の大学生の入学方法(選抜方法)、出身学科と大学での専門分野の関係、および大学の専門分野への適応状況を調査している。その結果、工業科から工学系、商業科から社会科学系といった関連分野に進学した専門学科出身者は普通科出身者と比

較して相対的に適応度が高いこと、一方で工業科および農業科から文系学部といった異分野への進学者も一定数存在し、この場合学生の適応度が低くなりやすいことを明らかにした。その上で山村らは、高校での専門教育＝職業教育が大学での専門分野の学習に対してもつプラスの作用、および専門学科出身者の関連分野への進学動機の強さを推察し、今後の分析課題として提示している。

山村らの研究は、高校での教育内容と大学等での専門分野との関連性について専門学科出身者の大学適応の観点から検討したものであるが、その分析結果は専門学科における教育内容の有意性の認識を考える上でもひとつの視点を内包している。すなわち、専門学科においては専門教育＝職業教育を「自分にとって有意なもの」と見なすか否かが生徒の進学動機に影響しているのではないか、という視点である。さらに踏み込んでいうならば、職業教育の有意性を認識した生徒ほど現在の専門分野と関連した分野への進学を促されるのではないかと推測される。

教育内容の有意性の認識が進学希望分野とどのように関連づけられているのか。これが第二の分析の視点となる。

以上の分析の視点に基づいて、本研究では次の2つの仮説を設定した。

仮説1：専門学科では、「進学」を希望する生徒においても職業教育を「有意なもの」として認識しているのではないかと推測される。

仮説2：専門学科において、生徒は職業教育を「自らにとって有意なもの」と認識することで、高校での専門分野と関連した分野への進学を志向するようになるのではないかと推測される。

3 分析の対象と方法

本研究では、X県の専門高校および普通高校、計3校の1年生および2年生1,509名を対象に、2011年2～3月、質問紙調査を実施した。本稿で分析に使用するのは、この調査対象のうち2年生777名から得たデータである⁽⁶⁾。

ここで、調査対象校3校の概要を述べておきたい。表1は調査対象校であるA高校、B高校、C高校の特徴を整理したもの、また表2は本稿の分析対象である2年生の進路希望をまとめたものである。

表1 調査対象校の概要

学校	概要	学科・コース		普通教育科目単位数 専門教育科目単位数
A高校	<ul style="list-style-type: none"> ・進学重視型の学科集合型高校。 ・1995年開校 ・1学年8クラス 	普通科		90 —
		国際文化科		57～65 25～39
		情報技術科		51～67 23～39
		情報システム科		58～70 20～32
		流通サービス科		54～68 22～36
B高校	<ul style="list-style-type: none"> ・進路対応型の専門高校。 ・2005年、それまでの商業科を改編し、3コースを設置。 ・1学年6クラス 	商業科	会計コース	53～68 20～35
			情報コース	53～68 20～35
			国際コース	53～68 20～35
C高校	<ul style="list-style-type: none"> ・単位制の普通科進学校。 ・1学年8クラス 	普通科		90 —

A高校は進学重視型の学科集合型高校である。1995（平成7）年開校で、現在、普通科、国際文化科、情報系の情報技術科、商業科に当たる情報システム科と流通サービス科が設置されている。表2からもわかるように進学希望者の割合は高く、93.7%の2年生が高校卒業後進学を希望し、うち79.1%が4年制大学を希望している。ただし学科によって傾向は異なり、普通科、国際文化科と比較して、情報技術科、情報システム科、流通サービス科の専門3学科では専門学校進学希望者の割合が相対的に高くなる。

表2 学校別・学科別の進路希望 (%)

		進学				就職	未定
		4年制大学	専門学校	短大	その他		
A高校	全体 (n=301)	79.1	9.6	3.0	2.0	4.3	2.0
	普通科 (n=77)	96.1	1.3	0.0	1.3	0.0	1.3
	国際文化科 (n=75)	86.6	6.7	0.0	2.7	4.0	0.0
	情報技術科 (n=37)	70.3	18.9	0.0	0.0	5.4	5.4
	情報システム科 (n=40)	75.0	5.0	2.5	5.0	7.5	5.0
	流通サービス科 (n=72)	59.7	19.5	11.1	1.4	6.9	1.4
B高校	全体 (n=210)	21.4	39.0	8.6	1.9	24.3	4.8
	会計コース (n=105)	25.7	27.6	5.7	2.9	31.4	6.7
	情報コース (n=92)	18.5	46.7	10.9	1.1	19.6	3.2
	国際コース (n=13)	7.7	76.9	15.4	0.0	0.0	0.0
C高校 (n=264)		94.3	1.8	0.8	1.5	0.8	0.8

B高校は進学対応型の商業高校である。2005（平成17）年にそれまでの商業科を改編し、現在、学科内に会計、情報、国際の3コースが設置されている。生徒は、1年次に共通のカリキュラムを受けた後、2年進級時に3つのコースのいずれかを選択する。3年進級時のコース変更も可能となっている。表2を見ると、2年生の70.9%が高校卒業後進学を希望している。進学希望の傾向はA高校と異なり、4年制大学への進学希望が21.4%であるのに対して専門学校および短大への進学希望が47.6%と高くなっている。

C高校は単位制の普通科進学校であり、A高校およびB高校の比較対象校として調査を実施した。入学難易度はA高校の普通科および国際文化科と同程度で、ほとんどの生徒が4年制大学への進学を希望している。

これら3校のうち、とくにA高校およびB高校の専門学科に共通しているのは、科目選択制を取り入れることで専門科目および普通科目の履修単位数に一定の幅をもたせている点である。表1を見ると、A高校の専門学科では最大16単位（情報技術科）、B高校では15単位の範囲で普通科目と専門科目のいずれかを選択できるようになっている。このように科目選択の幅を広げることで、専門学科に規定されている原則25単位の専門科目単位数を確保し

つつ普通科目も履修しやすくし、専門学科の枠組みのなかで進学希望に対応しようと試みているのである。

4 専門学科における教育内容の有意性の認識と進路形成

(1) 専門学科と普通科における有意性の認識の差異

ここではまず、第一の分析課題、進学希望者は教育内容のどの側面を「自分にとって有意なもの」として認識しているのか、専門学科と普通科との間でその認識に差異はあるのか、について検討することから始めたい。

本研究では、専門学科および普通科の生徒が現在学んでいる教育内容のどの側面に有意性を見いだしているのかについて、カリキュラムおよび授業に対する主観的な評価の観点から調べ、その特徴を整理した。具体的には、「あなたが受けている授業のなかに次のような授業はどれぐらいありますか」に関する質問6項目、「この学校での勉強について次のことはどれぐらい当てはまりますか」に関する質問6項目の計12項目⁷⁾の回答結果に因子分析を施した。その結果が表3である。

表3 カリキュラムの有意性の認識構造（主因子分析結果、プロマックス回転後）

	I (専門有意性)	II (進学有意性)	III (即時有意性)
資格につながることを学んでいる	.958	-.100	-.122
中学までになかった専門的な内容を学んでいる	.696	-.141	-.081
資格を得るための勉強ができる授業	.582	-.134	.156
将来の自分に役立つことを学んでいる	.516	.305	.059
日常生活に役立つことを学んでいる	.444	.276	.145
受験に役立つことを学んでいる	-.065	.945	-.176
大学受験に必要な勉強ができる授業	-.170	.747	.036
進路に向けての準備を集中的にしている	-.032	.537	.091
大学や専門学校で学びたい分野の基礎勉強ができる授業	.204	.426	.161
自分の趣味や楽しみに合った授業	-.037	-.074	.901
自分の長所を生かすことができる授業	-.036	-.061	.863
興味をもって学べる授業	.019	.140	.703
初期固有値	3.987	2.543	1.272

因子分析の結果、3因子が析出された。この結果をもとに各因子の性格づけをすると、第1因子については“専門的な内容”の学習や資格取得に関連する項目が見られることから「専門有意性」の因子と見なすことができる。第2因子については受験準備や高等教育に向けての基礎学習に関連する項目が並んでいることから「進学有意性」、第3因子については興味・関心の充足に関連する項目で構成されていることから「即時有意性」と、それぞれ解釈した。生徒は、これら3つの側面から教育内容を意味づけているのである。

それでは、これら3つの有意性の認識について、専門学科と普通科との間でどのような差異が見られるだろうか。本研究の主題に基づき、高等教育への進学希望者に焦点づけてその特徴を見てみよう。

表4は、学科によって因子得点の平均が異なるかどうかを調べるために、3つの有意性因子について学科をグループ分けとする一元配置分散分析を行った結果である。ここにある「専門学科(A校)」とはA高校の専門3学科(情報技術科, 情報システム科, 流通サービス科)を、「専門学科(B校)」はB高校を、「普通科(A校)」はA高校の普通科を、「普通科(C校)」はC高校をそれぞれ表している。職業学科と普通科とを比較するため、A高校の国際文化科は分析から除外した。また、分析対象は進学希望者のみである。

表4 学科ごとの平均因子得点の比較(進学希望者のみ:一元配置分散分析)

	専門学科 (A校)(n=134)	専門学科 (B校)(n=147)	普通科 (A校)(n=76)	普通科 (C校)(n=256)	検定
専門有意性	3.82	3.89	2.92	3.04	F(3,606)=83.181**
進学有意性	3.24	3.04	3.86	3.88	F(3,603)=60.479**
即時有意性	2.71	<u>2.45</u>	2.43	2.59	F(3,607)=3.300*

**p<.01 *p<.05

一元配置分散分析の結果、「専門有意性」因子と「進学有意性」因子について1%水準で有意な主効果が見られた。多重比較の結果、「専門有意性」については、専門学科(A校)および専門学科(B校)の因子得点平均値が、普

通科（A校）と普通科（C校）を有意に上回っていた。それに対して、「進学有意性」については、普通科（A校）および普通科（C校）の得点平均値が、専門学科（A校）と専門学科（B校）よりも有意に高く、「専門有意性」とは逆の結果となった。この結果は、同じ「進学」希望者であっても専門学科と普通科とでは教育内容の有意性の認識の仕方が異なっており、専門学科の進学希望者は「専門有意性」の観点から教育内容を意味づける傾向にあることを示している。すなわち、専門学科では、「進学」を希望する生徒においても職業教育の側面を「有意なもの」と見なしているのである。これは、仮説1「専門学科では、進学を希望する生徒においても職業教育を“有意なもの”として認識しているのではないか」を支持する結果となっている⁽⁸⁾。

以上の結果について、職業科目や資格関連の科目を多く学んでいる専門学科において「専門有意性」が高くなるのは当然ではないか、との批判があるかもしれない。しかし、「生徒による教育内容の有意性の認識」と「進路」との関係を考慮したとき、専門学科と普通科との間に見られる上記の差異には看過できない面がある。というのも、専門学科において生徒が認識する「専門性」は、「進学」という当面の進路選択とは切り離された形で認識されている可能性があるからである。すなわち、生徒は専門学科の教育内容を「専門知識を得るのには役立つけれども、進学には関係ない」と認識している、という事態も想定できるわけである。これは、専門学科の教育内容が「進学有意性」の面で普通科より低く評価されている（表4）ことから考えても十分推測される事態といえよう。

この点について確認するために、有意性の認識の差異が生徒の進学に対する展望とどのように関連しているのか、明らかにする必要がある。

(2) 教育内容の有意性と進路展望との関連性

そこで次に、第二の分析課題、高校での教育内容と大学ないし専門学校での希望分野とはどのように関連づけられているのか、について検討していきたい。

本研究では、高等教育への進学動機に関する質問項目のうち、「現在学んでいることを活かすことができるような学校や分野に進学したい」と「現在学んでいることをもっと深めたいから」への回答結果を「とても当てはまる」= 4点、「まあ当てはまる」= 3点、「あまり当てはまらない」= 2点、「まったく当てはまらない」= 1点としてスコア化し、その合計値を「進学分野との関連性」スコアとして設定した。なお、これら2項目の合成尺度としての信頼性を示す α 係数は 0.719 と高い値を示している。

図2は、「進学分野との関連性」スコアを構成する上記2つの項目への回答結果について、学科別の割合を示したものである。興味深いことに、図2を見ると、いずれの項目についても肯定的な回答の割合が普通科より専門学科で有意に低くなっていることがわかる。普通科と比較して専門学科では、現在学んでいる内容を活かすことができるような進学先、あるいは深めることができるような進学先を志向する生徒の割合が少なく、教育内容と進路との関連性を意識する層と意識しない層とが分化する傾向にあるのである。

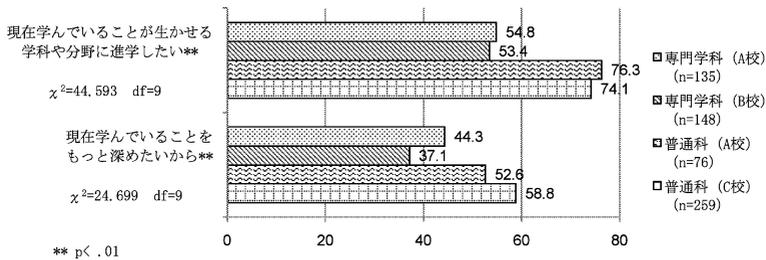


図2 「学習内容と進学分野との関連性」に関する認識 (%)

注) 「当てはまる」と「まあ当てはまる」に回答したものの合計

先に提示した仮説2「生徒は職業教育を“自らにとって有意なもの”と認識することで高校での専門分野と関連した分野への進学を志向するようになるのではないか」に基づくならば、「専門有意性」の認識が生徒の進学動機に影響し、関連分野への進学を促すものと推測される。「専門有意性」の認識は、生徒の進路展望の形成について仮説通りの効果をもたらしているのだろう

か。

この点を検討するために、「進学分野との関連性」スコアを従属変数とした重回帰分析を行うこととした。分析に用いる変数は、表5の通りである。独

表 5 分析変数

従属変数	
「進学分野との関連性」	「現在学んでいることが活かせる学科や分野に進学したい」「現在学んでいることをもっと深めたいから」(「とても当てはまる」= 4～「まったく当てはまらない」= 1)を合成変数化
独立変数	
4年制大学希望ダミー 専門学校・短大希望ダミー 推薦入試志向	高卒後の進路が4年制大学 = 1, それ以外 = 0 高卒後の進路が専門学校, 短大 = 1, それ以外 = 0 「推薦入試を受けられるならばぜひ利用したい」「入試では筆記試験だけでなく内申書や高校での取り組みをもっと重視してほしい」(「とても当てはまる」= 4～「まったく当てはまらない」= 1)を合成変数化
普通科目へのコミットメント	国英数理社のそれぞれの値(「とても興味をもっている」= 4～「まったく興味をもっていない」= 1, および「授業を取っていない」= 0)を合成変数化
職業科目へのコミットメント	「とても興味をもっている」= 4～「まったく興味をもっていない」= 1, および「授業を取っていない」= 0
現在の成績 資格取得数 教育内容に関する満足度	「上のほう」= 5～「下のほう」= 1 取得した資格の数(最低値 = 0～最高値 = 12) 「現在通っている学校の教育内容にどれくらい満足していますか」(「とても満足している」= 4～「とても不満である」= 1)
専門有意性	「資格につながることを学んでいる」「中学までにはなかった専門的な内容を学んでいる」「資格を取るための勉強ができる授業を受けている」「将来の自分に役立つことを学んでいる」「日常生活に役立つことを学んでいる」を合成変数化
進学有意性	「受験に役立つことを学んでいる」「大学受験に必要な勉強ができる授業を受けている」「進路に向けての準備を集中的にしている」「大学や専門学校で学びたい分野の基礎勉強ができる授業を受けている」を合成変数化
即時有意性	「自分の興味や楽しみに合った授業を受けている」「自分の長所を生かすことができる授業を受けている」「興味をもって学べる授業を受けている」を合成変数化

立変数には、「専門有意性」「進学有意性」「即時有意性」の3つの有意性因子の他に、専門学科から高等教育への進学に関連することが予測される8つの項目を用いた。独立変数にある「推薦入試志向」については、中村（2006，2011）の調査をもとに2つの項目を設定し、その合成変数を用いている。図3は推薦入試に関する項目の回答結果を示したものであるが、専門学科において推薦入試の利用志向が強くなっており、中村が指摘するように推薦入試をはじめとするマス選抜が非進学校からの進学を誘導する装置になっていると推察される。

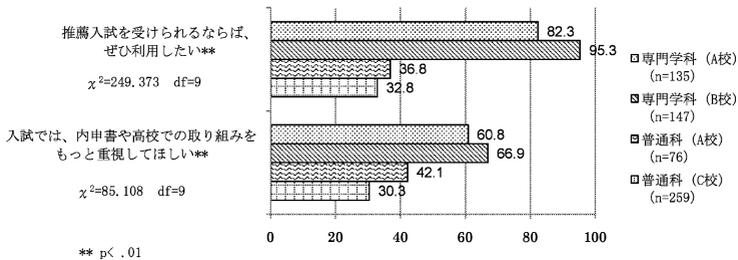


図3 推薦入試に関する志向性 (%)

注) 「当てはまる」と「まあ当てはまる」に回答したものの合計

重回帰分析の結果を示したものが表6である。以下では、3つの有意性が生徒の進路展望の形成とどのように関連しているかに着目してみたい。

まずモデル1を見てみよう。専門学科A校およびB校に注目すると「職業科目へのコミットメント」が5%水準で有意な効果を示しており、職業科目に対する関心が「進学分野との関連性」の意識を高めることが見て取れる。また専門学科A校においては、10%水準ではあるが「現在の成績」が有意な効果を示している。

ところで、「専門有意性」について見てみると、専門学科A校において10%水準で有意な効果が見られるもののB校においては明確な効果を見出すことができない。それに対して、普通科では1%水準で有意な効果を示している。「専門有意性」は、その認識度が相対的に高いはずの専門学科において「進

表6 「進学分野との関連性」の規定要因分析（重回帰分析：数値は標準化係数）

	専門学科（A校）			専門学科（B校）			普通科（A校, C校）		
	モデル1	モデル2	モデル3	モデル1	モデル2	モデル3	モデル1	モデル2	モデル3
4年制大学希望ダミー	0.074	0.125	0.127	0.001	0.204	0.203	0.129	0.133	0.124
専門学校・短大希望ダミー	0.036	0.141	0.147	-0.260	0.002	0.005	0.041	0.081	0.060
推薦入試志向	0.119	0.056	0.046	-0.086	-0.157+	-0.158+	0.118*	0.177**	0.095+
普通科目へのコミットメント	-0.046	-0.117	-0.136	0.028	-0.022	-0.039	0.194**	0.241**	0.102
職業科目へのコミットメント	0.239*	0.264**	0.265**	0.204*	0.259**	0.266**	—	—	—
現在の成績	0.168+	0.176+	0.198*	0.151	0.146	0.136	0.023	-0.013	-0.009
資格取得数	0.128	0.096	0.093	-0.064	-0.040	-0.067	0.053	0.034	0.057
教育内容に関する満足度	-0.031	-0.048	-0.059	0.192*	0.101	0.059	-0.039	0.001	-0.078
専門有意性	0.168+		0.022	0.121		-0.041	0.337**		0.235**
進学有意性		0.377**	0.337**		0.405**	0.416**		0.207**	0.078
即時有意性			0.057			0.101			0.212**
調整済R ²	0.176	0.269	0.271	0.181	0.309	0.313	0.235	0.180	0.247
sig	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000	0.000

**p<.01 *p<.05 +p<.10

学分野との関連性」の形成にはっきりとした影響力を及ぼしていないのである。

ただし、この結果の解釈については注意が必要である。なぜならば、専門学科では生徒の「専門有意性」の認識が総じて高く、生徒間の差が小さいため、かえってその影響力が低く示され、逆に普通科では生徒間で認識にばらつきがあるため、その影響力が高く示されているとも考えられるからである。そこで、「進学有意性」を投入したモデル2を見てみよう。これによると、専門学科A校およびB校では「職業科目へのコミットメント」が、普通科では「普通科目へのコミットメント」と「推薦入試志向」が、それぞれ「進学分野との関連性」に影響を及ぼしていることを読み取れる。また、推薦入試の利用志向の強いB校において、10%水準ながら「推薦入試志向」がマイナスの効果を示している⁽⁹⁾。そして、「進学有意性」に目を向けると、専門学科A校およびB校、普通科のいずれにおいても1%水準で有意な効果を示していることがわかる。「進学有意性」は、他の変数を統制しても、学科に関係なく「進学分野との関連性」の形成に作用しているのである。

最後に、3つの有意性をすべて投入したモデル3を見てみるとどうであろうか⁽¹⁰⁾。専門学科A校およびB校において、「進学有意性」は1%水準で有意な効果を示しているが、「専門有意性」と「即時有意性」の明確な影響力を見いだすことはできない。「専門有意性」が「進学分野との関連性」に強い影響力を及ぼしているのはむしろ普通科においてであり、「即時有意性」とともに1%水準で有意な効果を示している。

以上の分析結果は、専門学科において「専門有意性」の認識こそが関連分野への進学を促す、という先の仮説2に反する結果であるということが出来る。この結果から、生徒の「教育内容の有意性の認識」と「進路展望」との間に存在するある種の齟齬を読み取ることが出来るのではないだろうか。すなわち、専門学科における進学希望者は教育内容の「専門有意性」を強く認識しながら、その専門性を具体的な進路につなげていくための手段をもたない状況にある。これとは逆に普通科においては、進路を実現するための手段＝「進学有意性」を教育内容が備えているにも関わらず、進学希望の生徒はその有意性をあくまでも手段として捉え、長期的な進路展望とは関連づけていない、と考えられるのである。この点に関連して、図4は質問項目「進路の準備を集中的にしている」に対する学科別の回答結果を示したものである。これを見ると、「進路の準備をしている」と回答した生徒の割合が、普通科と比較して専門学科で有意に低くなっていることがわかる。ここからも、専門学

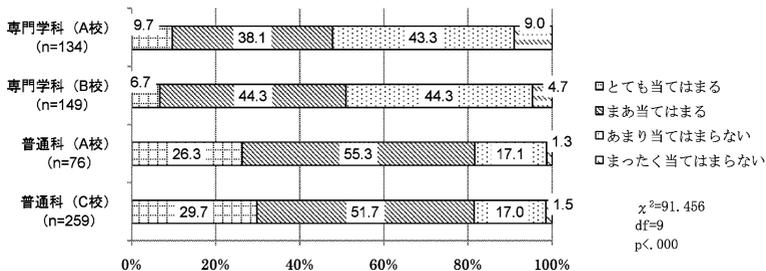


図4 「進路の準備を集中的にしている」に関する割合 (学科別, 進学希望者のみ: %)

科における進学希望者の「教育内容の有意性の認識」と「進路展望」との間に一定の齟齬が存在するのを見いだすことができるだろう。

5 まとめと課題

本研究では、高等教育への進学を希望する専門学科の高校生が自ら経験している職業教育の内容にいかなる有意性を認識しているのか、その認識は生徒の進路展望とどのように関連しているのか、について実証を試みてきた。ここで、分析を通して得られた知見をまとめた。

第一に、高等教育への進学希望者による「教育内容の有意性」の認識が、専門学科と普通科でどのように異なるのかを検討した。その結果、専門学科の生徒は「専門有意性」の観点から、普通科の生徒は「進学有意性」の観点から、それぞれ教育内容を意味づける傾向にあることが明らかになった。専門学科では「進学」を希望する生徒においても職業教育の側面を「有意なもの」「正当な知識」として認識していることを、この結果は表している。バーンステインの概念に基づくならば、普通教育と職業教育は強い分類のもとに境界づけられ、教育内容の有意性に関する生徒の認識枠組（＝認知ルール）を規定しているのである。

第二に、現在の教育内容と大学ないし専門学校での希望分野とを生徒はどのように関連づけているのか、について分析した。その結果、専門学科における「専門有意性」は「進学分野との関連性」の形成、すなわち現在の専門分野と関連した分野への進学志向の形成に対して明確な効果をもっていないこと、むしろ「進学有意性」が「進学分野との関連性」の形成に影響を及ぼしていることが明らかになった。専門学科の教育内容がもつ職業教育の側面は、少なくとも進学希望者に限っていうならば、具体的な進路とは切り離された形でその有意性が認識されている（「専門知識を学んでいるけれど、進路とは直接は関係ない」）ことが、この結果から推定される。また、普通科における「進学分野との関連性」の規定要因を見てみると、「進学有意性」は「進

学分野との関連性」の形成に一定の効果を示すものの、むしろ「専門有意性」の方が明確な影響力をもつことが観察された。

これらの結果から推察されるのは、高等教育への移行における「教育内容の有意性」の認識について、専門学科と普通科に見られる対照的な特徴である。すなわち、専門学科における進学希望者は教育内容の「専門有意性」を強く認識しながらその専門性を進路につなげていく手段をもっていない状況にあるのに対し、普通科では「進学有意性」という教育内容の手段的側面に対する認識が高いにも関わらず、この有意性を具体的な進路展望に結びつけられない状況にある、と考えられるのである。高等教育への進学について「手段をもたない専門学科」と「手段しかもたない普通科」。以上の分析結果は、中等教育段階での職業教育と普通教育が内包する「教育内容の有意性の認識と進路達成の手段の不一致」という課題を示唆しているといえよう。

誤解のないように述べておくと、本研究は、専門学科からの高等教育への進学について「高校での専門分野と進学先での希望分野を関連づけるべきである」と論じているわけではない。とはいえ、高校段階で職業教育を学んできた層が一定の規模で大学等に進学するようになるとすれば、専門教育、職業教育で形成された能力をどのように評価し、位置づけていくかなど、中等教育と高等教育との専門・職業教育の側面での関連性に一層の光が当てられる必要があるだろう。

本研究の結果から示唆された、専門学科における「教育内容の有意性の認識と進路達成の手段の不一致」という知見は、一時点で収集された限定的な量的データの分析に基づくものであり、仮説の域を出ない。教育内容の有意性の認識は、関連分野への進学も含む進学アスピレーションの形成に対して何らかの役割を果たしているのか。また、進学に向けての取り組みの過程で、教育内容（とくに職業教育の内容）の有意性の認識がどのように変容していくのか。こうした「教育内容の有意性」と「進路展望」とのダイナミズムを解明していくことが、今後の課題となる。そのために、生徒の有意性の認識の時系列的な変化を、各学校の進学指導体制と関連づけて質的に分析しなけ

ればならない。また、本研究では、専門学科における進学希望者の有意性の認識を普通科との比較を通して検討してきたが、進学希望者と就職希望者の間の有意性の認識の差異についても比較検討する必要がある。それによって、専門学科における生徒の進路分化に教育内容の有意性がどのような役割を果たしているのか、明らかになるだろう。

注

- (1) 高校教育における専門学科には「工業」「商業」「農業」など職業に関連する学科だけでなく「理数」「音楽」「美術」等の非職業的な学科も含まれるが、本研究ではとくに職業学科を対象として分析を行う。
- (2) 専門学校（専修学校専門課程）の位置づけについて、これを「高等教育機関」と見なすか「中等後教育機関」と見なすか、明確な合意が形成されているわけではない。とはいえ、大学入学枠が拡大するなかにあつて専門学校への進学率は安定的に推移していること、また学校教育法第132条における「専修学校専門課程修了者の大学への編入」の承認、2005年の「高度専門士の付与規定」の制定等、専門学校を高等教育の一部として組み入れる動向があることから、本研究では専門学校を高等教育機関のひとつとして位置づけている。
この点に関連して、長尾（2008）は、1990年以降の進学率の上昇を後追いつる形で専門学校の位置づけが「中等後教育機関から高等教育機関へ」と変化したことを指摘している。この変化の背景として、長尾は進学者層の変化をあげ、従来高卒就職者に近かった専門学校進学者の出身階層が、1990年代以降大学および短大への進学者に近くなったことを実証している。
- (3) 図1における専門学科からの進学率は、普通科、総合学科、その他の学科を除いた専門学科からの進学率を示している。また、大学等への進学率については、通信教育部への進学を除いた数値を算出している。
- (4) 本研究では「有意性」(relevance)について、ブルナー (Bruner, J. S.) の「教育のリレヴァンス」の定義に基づき「受ける教育の内容が自己と社会との双方の核心と結合しているかどうか」(Bruner 訳書 1972, 205 頁)、すなわち教育内容が個人ないし社会に対してもつ有意性、関連性、意義を表す概念として用いている。ある教育内容について、学習者ないし学習者の周囲がそれを何らかの形で「学ぶに値するもの」と見なしたとき、その教育内容は「リレヴァントな」教育内容となる。
なお、本田（2005, 2009）は relevance について「意義」の訳語を当てているが、本研究では学習者による教育内容への“意味”付与の側面に焦点を当てることから「有意性」という訳語を用いることとした。
- (5) 山村ら（2010）は、専門学科の卒業生の大学への適応状況にまで踏み込んで検討を試みており、注目に値する。なお、山村らのこの研究については本稿「2 分析の視点」でも改めて取り上げる。

- (6) 本研究が2年生を分析対象とする理由は、専門学科を含めた進路多様校において、2年生から3年生の進級時が就職から進学への進路変更、いわゆる進学シフトが生じやすい時期だと考えるからである。

この点について、中村(2010, 2011)は進路多様校5校を対象とした3年間の継続調査において、四大以外の進路希望から四大希望に変更する「四大シフト」が高3の1学期までに拡大し、とくに高2の2学期から高3の1学期にかけて生じやすくなっていることを指摘している。この傾向には学科間で差が見られ、工業科では総じて四大シフトが生じにくく、商業科では相対的に生じやすくなっている。

本研究の調査実施時期が2～3月という進級時期であったこと、また主な調査対象が商業科であることから、中村の知見を参照し、今回の分析対象として2年生を選定した。

- (7) 因子分析を施した12項目のうち、「あなたが受けている授業のなかに次のような授業はどれくらいありますか」6項目については5件法(「ほとんどすべて」=5, 「半分より多い」=4, 「半分ぐらい」=3, 「半分より少ない」=2, 「ほとんどない」=1)で、「この学校での勉強について次のことがどれくらい当てはまりますか」6項目については4件法(「とても当てはまる」=4, 「まあ当てはまる」=3, 「あまり当てはまらない」=2, 「まったく当てはまらない」=1)でそれぞれ回答を求めており、尺度が異なっている。そこで、12項目すべてについて5件尺度を基準とした標準化を行った。
- (8) 表4では、「即時有意性」についても5%水準で有意な主効果が見られた。多重比較の結果、専門学科A校と専門学科B校の間に有意差があり、A校がB校を有意に上回っていた。

専門学科間でなぜこのような差が生じるのかについて明らかにするためのデータを、本研究はいまのところ持ちあわせていない。ここでは、授業形態に關

表7 授業形態に関する生徒の評価(%)

		ほとんど すべて	半分より 多い	半分 ぐらい	半分より 少ない	ほとんど ない
作業を通して課題に取り 組む授業* $\chi^2=9.283$ df=4	専門学科 (A校)	4.5	19.4	44.0	26.1	6.0
	専門学科 (B校)	3.4	12.4	38.6	29.7	15.9
グループで協力して課題 に取り組む授業** $\chi^2=30.319$ df=4	専門学科 (A校)	0.8	12.1	31.1	42.4	13.6
	専門学科 (B校)	1.4	3.4	23.0	31.1	41.2
生徒自身が資料まとめ、 発表する授業** $\chi^2=16.375$ df=4	専門学科 (A校)	0.7	8.2	17.9	38.1	35.1
	専門学科 (B校)	0.0	1.4	14.9	29.1	54.7

**p<.01 *p<.05

専門学科 (A校) : n=134 専門学科 (B校) : n=145

する生徒の主観的な評価の観点から仮説的な見解を提示しておきたい。

本調査では、以下のような形態の授業がどの程度実施されているかについて5件法で調べている。

- 「作業を通して課題に取り組む授業」
- 「グループで協力して課題に取り組む授業」
- 「生徒自身が資料をまとめ、発表する授業」

表7は、専門学科A校とB校とを比較したクロス分析の結果であるが、いずれの項目についてもA高校で肯定的な評価の割合が高くなっていることがわかる。上記の項目はいずれも授業において生徒がどの程度の統制を有するのかを聞くものであり、バースティンのいうところの枠づけの強弱の程度を表している。表7の結果は、B高校と比べてA高校の枠づけが弱く、生徒がより多くの主導権をもつ授業が展開される傾向にあることを示している。

枠づけが弱まり、授業において生徒がより多くの統制を有することで、生徒は自らの興味や関心を授業のなかで表現する機会を得やすくなる。こうした枠づけの差異が「即時有意性」の差異を生み出しているものと推測されるのである。

- (9) この結果の解釈については、専門学科における進学指導体制を考慮に入れなければならない。本研究では、質問紙調査に先立ち専門学科のA高校およびB高校の教員を対象とした予備的な聞き取り調査を実施しているが、そのなかで推薦入試に対する次のような取り組みが示唆された。

- ①とくに大学進学については多くの生徒が推薦入試を利用する
- ②そのため専門学科推薦枠、指定校推薦枠の有無に合わせて進学先を選択することになる
- ③全体としては社会科学系への進学が多くはなるが、基本的には学力ランクと推薦枠に合わせて進学先を選択している

この聞き取り調査の結果に基づくならば、表6の結果について、推薦入試志向が強いB高校では推薦入試枠の有無を進学先選択の優先事項とすることで、生徒間に「まずは進学」という意識が形成され、かえって「進学分野との関連性」の形成が阻害されてしまうと理解することも可能である。

しかし、この解釈はあくまでも仮説に過ぎず、推薦入試に対する取り組みの過程を視野に入れたさらなる検証が必要である。

- (10) 「専門有意性」と「進学有意性」の相関係数を見ると、専門学科(A校)で0.529、専門学科(B校)で0.418、普通科で0.540と高い相関関係にあり、多重共線性が生じていることが考えられる。そこでVIFを確認したところ、いずれの変数においても2以下であり多重共線性の可能性は低いと判断した。

引用・参考文献

- 番場博之(2010)『職業教育と商業高校 新制高等学校における商業科の変遷と商業教育の変容』大月書店
- Bernstein, B. (1978) 萩原元昭編訳(1985)『教育伝達の社会学 開かれた学校とは』明治図書

- (1996) 久富善之他訳 (2000) 『〈教育〉の社会学理論 象徴統制, 〈教育〉の言説, アイデンティティ』法政大学出版局
- Bruner, J. S. (1971) 平光昭久訳 (1972) 『教育の適切性』明治図書
- 本田由紀 (2005) 『若者と仕事 「学校経由の就職」を越えて』東京大学出版会
- (2009) 『教育の職業的意義 — 若者, 学校, 社会をつなぐ』ちくま新書
- 片山悠樹 (2010a) 「職業教育と能力アイデンティティの形成 — 工業高校を事例として —」『教育学研究』第77巻第3号, 17-31頁
- (2010b) 「専門高校の職業選抜 — 工業高校を事例に —」中村高康編著『進路選択の過程と構造 高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房, 118-140頁
- 長尾由希子 (2008) 「専修学校の位置づけと進学者層の変化 — 中等後教育機関から高等教育機関へ」『教育社会学研究』第83集, 85-106頁
- 中村高康 (2006) 「専門高校からの大学進学 — アスピレーションの推移の分析から —」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』32, 125-144頁
- (2010) 「四大シフト現象の分析」中村高康編著『進路選択の過程と構造 高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房, 163-183頁
- (2011) 『大衆化とメリトクラシー 教育選抜をめぐる試験と推薦のパラドクス』東京大学出版会
- 佐藤広志 (2000) 「職業高校の分析 — 職業高校卒業生の学習歴 —」荒井克弘編『学生は高校で何を学んでくるか』大学入試センター研究開発部, 85-101頁
- 山村滋, 鈴木規夫, 濱中淳子 (2010) 「職業高校からの大学入学者の分析 — 入学方法・進学分野および適応状況 —」『大学入試研究ジャーナル』No.20, 13-21頁
- 横井敏郎 (2008) 「高校教育改革の現段階とその評価」工藤文三研究代表『今後の後期中等教育のあり方に関する調査研究 (最終報告書)』国立教育政策研究所, 307-321頁
- Young, M. F. D. (1998) *The Curriculum of the Future: From the 'new sociology of education' to a critical theory of learning*, Falmer Press
- (2008) *Bringing Knowledge Back In: From social constructivism to social realism in the sociology of education*, Routledge